

刊行に寄せて

阪神・淡路大震災から5年を経た今日、神戸赤十字病院が当時を振り返り、災害救護活動記録をまとめた記念誌を発刊されることは、復興が進むなか、震災の教訓を今後の救護活動に繋げるうえから大変有意義なものであります。

平成7年1月17日午前5時46分、わが国において都市を直撃した初めての直下型地震が発生しました。神戸赤十字病院は最大の被災地である神戸市のほぼ中央に位置し、塔屋の一部倒壊やひび割れ、医療機器等の毀損を受け、また、病院職員自身も被災者となるという状況にあって、赤十字の使命である災害救護活動にいち早く取り組み、震災発生30分後の6時過ぎには患者の受け入れを開始しました。余震が続く不安のなか、災害当日にまず到着した10支部19日赤救護班と連携して、次々に搬送される被災傷病者の診療にあたるその一方で、救護班の後方支援病院として、多くの患者で満床に陥った同院から、症状が落ち着いた患者を他赤十字病院等へ転送するなど、赤十字の総合力を生かした医療提供を行いました。

このように一連の災害救護活動において、迅速で適切な医療を提供することができましたのは、全国組織である赤十字の強みであり、また、ボランティアとして災害救援活動の支援をしてくださった皆様や国、県を始めとする関係機関が、一丸となって災害に立ち向かった成果であると考えます。

その後、同院は心的外傷後ストレス障害に着目し、今回の震災が被災者に与えた心理的障害について患者調査と診療相談を行い、その結果をもとに、診療科として当時まだ少なかった『心療内科』を平成8年に設置するなどして先駆的な活動を行いました。院内での診療活動はもとより、仮設住宅への医療スタッフの派遣、また救護員の心的外傷後ストレス障害にも取り組み、現在もその活動は続いております。

神戸の街並みは復興が著しく震災の傷跡は消えたかのように思われますが、心療内科への被災者の受診は途絶えることがなく、震災により心身に受けた傷の大きさをうかがわせます。

都市機能が一瞬にして紛砕され、6,000余名の命が奪われ、80万人が被災し、30万人が家屋の倒壊等により避難所暮らしを余儀なくされた阪神・淡路大震災は、さまざまな問題を私達に提起しました。そこで得た反省及び教訓は本書の刊行により記録として後世に残ることでしょう。

最後に、震災当時、自身が被災者でありながら神戸赤十字病院を基点とし、寝食を忘れて災害救護活動に力を尽くされた職員の皆様及び関係の皆様に対しまして、ここに改めて敬意を表します。

平成12年1月

日本赤十字社

社 長 藤 森 昭 一

はじめに

あの兵庫県南部を襲った激震により、瞬時にして神戸の街を瓦礫の原と化した阪神大震災から早や5年を迎えようとしております。

ここに、あらためて医療に携わるものとして、大震災の痛ましい犠牲となられた数多くの御霊の安らかならんことをお祈りし、哀悼の意を表しますとともに、今なお心や体に傷を受けながら、ひたむきな努力をしておられる被災者のみなさまに対して、被災を受けながら災害医療を行ってきました病院の立場から、これからも支えになっていきたいと思っております。

震災時、病院の施設や職員は大きな被害を受け苛酷な状況のもとで、25日間の長期に亘り災害医療救護を行ってきました。あれから5年経ち、震災を経験した職員は半数以下となり、当時の資料に基づいて被災地における病院の災害医療の実態と生の姿を、当時のわたくしたちが記録していた写真とともに残しておこう、また残す責務があるという声が盛り上がり、手づくりで、刊行する運びとなりました。

編集当初は、神戸赤十字病院の災害時の医療の姿を描く予定でしたすめてきましたが、記録を整理しておりますと当時のあまりにも想像を越えた異常な状況の中で、わたくしたちが努めを果たすことができましたのは、多くの病院外の人々の御協力の賜物であったことがよくわかりました。日本赤十字社は災害救助法において災害救助の担い手として位置づけられており、社業の根幹事業として活動してきましたが、災害救助は国、行政の責任であっても、現場では民間団体、ボランティアや市民ひとりひとりのご協力がなければなりません。

平成7年1月17日昼過ぎに神戸に入った赤十字救護班、また日本赤十字本社、各都道府県赤十字支部、全国92の赤十字病院の救護班はもとより、被災者の救護所での救護活動についての神戸市保健福祉局との協議、救出した傷病者を病院に搬送していただいた現場の消防救急の隊員からの災害情報の提供、神戸市内での病院の災害救急医療をまとめ分析いただいた神戸市立中央市民病院 立道 清救急部長、関連大学医学部、国立医療・病院管理研究所環境評価室 筧 淳夫室長、病院にいち早く駆けつけて活躍していただいた多くのボランティアの医師、看護婦および市民の方々から、当時をふりかえっていろいろな角度からご寄稿をいただきました。

また、災害現場からみて実効性のある「病院防災マニュアル」と、今回の災害にあたって大きな働きをしました「災害看護」を加えることにいたしました。わたくしたち自身も反省をこめながら作業を進めましたが、何かあきらめきれないものがありました。述而不作(のべてつくらず)。この記録が大災害時の医療に備える一助になれば幸いと思っております。

最後になりましたが、ご執筆いただきました諸先生方はじめ関係のみなさまに対しまして心から感謝申し上げます。

平成12年1月

神戸赤十字病院

院 長 上 林 恒 雄